

Catwalk



[特集]

さんじんきちまぐらわのはつがい
木ノ下歌舞伎『三人吉三廓初買』

まつもと市民・芸術館
Matsumoto Performing Arts Centre

vol.
05

2025
Winter

木ノ下歌舞伎 『三人吉三廓初買』

キノカブの真骨頂を
さらに味わい深くした松本特典

ヒトは過ちを繰り返す。個としての人間も、人類という種のくくりでも。自戒も込めつつ諷いだらけの世界を見直し、そうつくづく思う。芸術、特に古典と呼ばれる作品群にはそんな、ヒトの致し方ない癖（くせ）に対する対処法、知恵が織り込まれているのではなからうか。

江戸幕末から明治までを生きた河竹黙阿弥は、七五調の流麗なセリフで知られる歌舞伎界の大御所作家。その黙阿弥が1860年に書いた『三人吉三廓初買』は、欲と色と情にもつれた人びとの群像劇だ。戯曲のそこそこに、度し難い人の世を生き抜くための、黙阿弥翁の示唆と諷めが書き込まれているように思える。

歌舞伎を現代化することでその普遍性と新たな魅力を掘り起こす、木ノ下歌舞伎（キノカブ）版の『三人吉三』が世に出たのは2014年。主宰は言わずと知れた、まつもと市民芸術館芸術監督・木ノ下裕一だ。

今作は15年の再演を経て20年に再創造の予定だったが、世界的感染症禍の影響で公演中止に。4年ぶりの出直しにて松本の地へたどり着いた。原作の初演当時は、日本も大地震と疫病の流行に苛まれる暗い時代だったとか。120年超の時を隔てた符合に、鳥肌

2024年10月5日(土) 13:00
10月6日(日) 13:00
まつもと市民芸術館 主ホール

作：河竹黙阿弥
監修・補綴：木ノ下裕一
演出：杉原邦生 [KUNIO]
出演：
田中俊介 須賀健太 坂口涼太郎
藤野涼子 小日向星一 深沢萌華
武谷公雄 高山のえみ 山口航太
武居卓 田中佑弥 緑川史絵
川平慈英
緒川たまき 眞島秀和



が立つ。

同じ「吉三郎」の名を持つ和尚吉三（田中俊介）、お坊吉三（須賀健太）、お嬢吉三（坂口涼太郎）は盗み騙りが稼業の小悪党。この三人を主軸に、現行の歌舞伎では省かれる商人・文里と花魁・一重の恋と、キノカブ初演の際に154年ぶりに復活させた閻魔と亡者入り乱れての茶番『地獄正月齋日の場』を加えた三幕19場を約5時間で駆け抜ける。百両の金と宝刀・庚申丸の複雑な往還、苦境になお互いを求め合う情の行き交い。木ノ下の緻密かつ巧みな補綴と、ポップな中に批評性を覗かせる杉原邦生演出の融合が光る。盗み、殺し、色恋に仇討など次々に押し寄せる劇世界には、飽きも疲れもする暇はない。

終幕、新しい命を守って次代へ向かう文里一家と対照的に、吉三ら登場人物が終わり行く時代に添うように絶命していく。進化のため、淘汰される種を見るような凄味を感じた。

また導入で「TOKYO」と書かれた立て札が置かれ、それを裏返して「EDO」を見せて本編が始まり、初演・再演ではラスト再び「TOKYO」に戻されていた。が、今回返した札の裏は空白のまま。時空を越えた想像上

の帰還さえ許されぬ、愚かなヒトという迷子に戻る場所はあるのかと、作品に対する充足感とは別の無常を噛み締めさせられる秀逸な終幕だった。

今作には松本に根ざして演劇を続け、現在は当地の劇団シアターランポン代表の武居卓も出演。幼子から因業な金貸しまで、複数役を鮮やかに演じ分ける活躍ぶりを見せた。カーテンコールの中、共演陣に押し出されて松本の観客に深く頭を下げる武居の姿に拍手はいや増し、松本観劇をさらに味わい深いものにしてくれた。

大堀久美子（編集者）



「TOKYO」から「EDO」に転じた冒頭の偽お札売りから武居（中央）の七変化が始まる。



上／百両を拾ったおとせとお嬢吉三の出会いがすべての始まり。
中／「地獄正月齋日の場」のキラキラしさは杉原演出の魅力の一つ。
下／花魁の着物に打掛のように布団を重ねる衣装のアイデアも秀逸だった。

石丸幹二コンサート

with クリヤ・マコト

ちょっと懐かしい歌たち

REVIEW

4月の芸術監督団お披露目コンサート「はじめまして！」以来の登場、ゼネラルアートアドバイザーの石丸幹二が、自身のソロコンサートで観客を魅了した。タイトルは『石丸幹二コンサート with クリヤ・マコト ちょっと懐かしい歌たち』。大人の観客を中心にバルコニーまでいっぱいのお客様を優しく、あたたかく照らす太陽のような雰囲気、石丸がステージに登場した瞬間から広がっていく。盟友のピアニスト・クリヤマコトの

たたずまいからは深い信頼関係が伝わってくる。おそらくその曲、その瞬間で生み出されたものもあつただろう、ジャズにとどまらないユニークで、新鮮で、心地よい即興のアレンジ。石丸とクリヤがアイコンタクトで対話し、笑顔を交歓するたびに、客席の心をつかんでいく。時にクラシックの、時にミュージカルの歌唱を織り交ぜて、二人ならではの世界観が紡ぎ出されていった。

この日のプログラムは、コンサートの直前にリリースしたばかりの初のカバー・アルバム、石丸が愛した日本の名曲を多彩なアレンジによって収めた『with FRIENDS』の曲たちが中心。「切手のないおくりもの」を皮切りに、「ダンスはうまく踊れない」「卵・すばる」「さくらガーデン」「マイウェイ」など16曲を披露した。

「芸術監督団3人の企画がそれぞれ動き出していて、このコンサートもバトンを受け取り、よいリレーがきている。(新年度はホールが改修に入るため) 松本のいろいろな場所にコンサートを届けたい」と石丸ゼネラルアートアドバイザー。その卓越した歌声で優しく、あたたかく松本を照らし、包み込む活動が、このコンサートで始まりを告げたようだ。

日時：2024年11月9日(土) 15:00
会場：まつもと市民芸術館 小ホール
[CAST]
石丸幹二
クリヤマコト



二瓶野枝×矢萩美里×権頭真由『ははは』
会場：シアターパーク



二瓶野枝×矢萩美里× 権頭真由『ははは』

二瓶さん、矢萩さんともに移住され、お子さんを育て、仕事もしながら、大好きなダンスを続けてきた方々。その流れは、東京を基準にしたダンスのメインストリームとは違うやり方で、松本で新たなシーンを築いていらっやいました。ものすごくエネルギーが必要で、葛藤もあったと思う。私はこれまで、彼女たちのような活動とは触れ合わずにきたように思っています。ダンスとの関わりってそれぞれでいい。踊りたいという気持ち、ダンスへの野心は変わらない。そのことに気づかせてくれたことに感謝しています。

彼女たちの稽古場には何度か邪魔しました。音楽の権頭さんが自分はどういう動機で存在すべきかを突き詰めている様子に感激しました。ダンサーにそう問いかけるのは、演奏を通して身体性を常に考えているから。その意識の高さに驚きました。子どもたちもたくさん見に来てくれて温かい上演になりました。

からだ 身体と音楽 おんがく

「身体と音楽」第1弾は、8月24日(土)・8月25日(日)に芸術館2階のシアターパークと美術館の中庭というユニークベニューで上演。あいにく雨や雷にも見舞われましたが劇場ではない開放的な空間で3つの演目をラインアップ。倉田翠芸術監督の言葉で企画を振り返ります。

大友良英×小暮香帆 『セッション』

日本でもトップクラスの身体能力を誇るダンサー、小暮さんの魅せる力は、劇場文化だけではなく、ライブハウスやフェスなどで音楽の人とセッションをする中で鍛えられてきたものだと思います。圧巻でした。大友さんはメジャーシーンでも活躍されている一方、独自の活動も大事にしている方。二人は過去に何度かセッションしていて、狭い会場から広い会場まで身体一つ、楽器一つで戦ってきた。本当に私も興奮しました。決まった要素が「空間」しかない中で、1時間近くを即興で踊りっぱなし、演奏しっぱなしで魅せられる力はさすが。

大友良英×小暮香帆『セッション』
会場：松本市美術館 市民創造ひろば



小菅紘史×中川裕貴 『山月記』

この作品は違う会場で何回か見ました。『山月記』というフォーマットを、場やその土地に合わせて、変化させ、成立させることができる。それが彼らを呼んだ決め手です。私は演劇とダンスにボーダーを引けない。そしてダンサーではない彼らの身体強度は、ダンサーとしても勝ち目のなさを感じるほどです。私は声もダンスだと思っっているのですが、雨天で、横長の客席という難しい条件でしたが、身体の調整と同じように声を調整する様子が面白かったです。言葉に付随してある身体、演劇の中にある身体を見ることができてよかったです。

「身体と音楽」は手応えを感じたので毎年恒例にしたいと考えています。通し券ですべてを見てくださったお客様もいれば、一つだけというお客様もいた。高校演劇部の生徒さんが来てくださったのもうれしかった。

コンテンツポラリダンスは気軽に受け入れてもらえるものではないかもしれませんが、でも私は、そこに価値を見出し、「身体と音楽」で特別な体験をしてほしいと考えます。身体から生み出される表現の幅広さ、面白さを感じていただけたなら幸いです。

小菅紘史×中川裕貴『山月記』
会場：松本市美術館 市民創造ひろば



After Interview

UP



AND



Interview

めくるめくカラフルな衣装が躍動する、そして衣装の残像と同時に、際立って見えてくるのが説得力あるダンサーの身体。『UP AND DOWN』は、コスチューム・アーティストのひびのこづえが手がけたダンス作品だ。ひびのと言えば、まつもと市民芸術館ではアオイヤマダ主演『星の王子さま-サン=テグジュペリからの手紙-』、羽場裕一主演・野外劇『テンペスト』で衣装を担当している。公演の前に話を聞きました。

「たとえば演劇だったら、台本を読み込み、キャストに合う衣装をつくっていく。私が衣装を担当するとは言え、演出家のプランの中では、自分を主張しすぎではいけないわけです。その一方で、自分自身をストレートに表現できる場ができないものか考えたとき、ダンスであれば身体と服の関わり方が表現できる、自分でダンスをつくれれば全部できると思いついたのです。もちろん私には演出や振り付けはできません。だからいつもの順番とは逆で、最初に衣装ありきでつくってみようと。自分の中でテーマを決めて、イメージされるストーリーを考えて、そこに衣装を当てはめて……」

『UP AND DOWN』はそんなふうに着作された、ひびののダンス作品の一つ。出演者は松本に拠点を移した大宮大奨、山田うんや北村明子作品に出演している川合ロン、アオイヤマダとユニット「アオイツキ」を組む高村月と、松本と縁のあるダンサーが揃った。

「今回私が目指したのは子どもから大人まで楽しめる作品。ダンスって難しくなりすぎて、誰もが気軽に観るものではなくなっているのがもったいない。この作品を構想したとき、みんなが想像しやすいものとして御伽話にたどり着き、いくつかの話が浮かんだ。御伽話って最初は事件が起きるけれど、最後はハッピーエンド。それがいい。人生時々つらいけれど最後は大丈夫、というメッセージを込めています」

『UP AND DOWN』では、「裸の王様」「三匹の子豚」「赤ずきん」「シンデレラ」、そして「星の銀貨」で締めくくる、という流れがベースになっている。

「衣装をつくるときは、ダンサーの身体が見えてくることを最大の条件にしています。着ぐるみには絶対したくない。衣装の動きによって強調される身体。衣装で隠すことで見えてくる身体。公にするからより見える身体。それらを50分の中で見せていく。ただ、いくら優れたダンサーでも身体だけを見続けるのは難しい。だから舞台美術の代わりに衣装がある。衣装は舞台美術よりコンパクトで、ダンサーの身体と呼应して変化できるのが魅力」

「赤ずきん」の赤い衣装は踊らないと膨らまない。動くことで膨らむが、動きによって膨らみ方も変わる。「裸の王様」では伸びる素材を使った王様の衣装に3人が一緒に入って動き回る。さらには着替えのシーンも面白い見せ場になっていた。

コスチューム・アーティストの逆転の発想から生まれたダンス作品は、ダンサーの身体と衣装の融合で、観客を新たな地平に誘ってくれる。



DOWN

チャオ！バンビーニ2024AUTUMN
ひびのこづえ ダンスパフォーマンス
『UP AND DOWN』
日時：2024年11月23日(土) 14:00
11月24日(日) 14:00
会場：実験劇場
STAFF
衣装：ひびのこづえ
音楽：原摩利彦
CAST
大宮大奨 川合ロン 高村月



ミュージカル『王様と私』と言えば、近年ではブロードウェイで渡辺謙が主演したことでも話題を呼んだ。欧米列強が迫る1860年代のシャム（現タイ）を舞台に、王様と、子どもたちの家庭教師であるイギリス人将校の未亡人アンナが価値観の違いから衝突しながらも心を通わせてゆく名作だ。さて、この設定を明治の日本に移して喜劇に仕立て上げたのが、2025年2月のまつもと市民芸術館プロデュース『殿様と私』。時代の変わり目で奮闘する人びとを描いたエネルギーにあふれる評伝劇を得意とするマキノノゾミが老舗・文学座に書き下ろした作品を、自らの演出でお届けする。（公演情報は16ページ）

——マキノさんは今年度、上田市・犀の角『初級革命講座飛龍伝』、岐阜県・可児市文化創造センター『いびしない愛』、そして松本と、長期滞在での制作が続いています。

——どういふ巡り合わせか、滞在制作ばかりの

**この芝居にタイトルをつけるとしたら、
『殿様と私』以外にないですよ。
「なんかくだらなさそうだな、
観てみたいな」と俺が最初に思った。**

——今回は、ご自身で演出するわけですが、演出家目線で読み直していかがですか？

『殿様と私』でいえば、まず明治の文明開化のころのお話で、自分の家来を因循姑息だと新興勢力にバカにされた殿様（白河義晃）が、その仇討ち代わりに、鹿鳴館に乗り込んで、逆に見事なダンスを披露して見せることで相手にギャフンと言わせてやろうってことになって、米国人のアンナから、好きでもないダンスを習うことになるというストーリーなわけです。好きになれないことでも、これからの時代そうも言っていられない、必死で覚えなくちゃいけないと、まあ、そういうお話なわけですけど、これって執筆した当時よりも、今のこの時代の方が響くんじゃないかと思いました。今すごく変化の激しい時代でしょ？ Aーだとか、Iーだとか、好きでもないのにそういうものについてゆくことを強いられる中高年の悲哀っていうかね。もう身につまされるわあ（笑）。自分もそうだけど、もうお手上げっていうか、そもそも学ぶ気もあんまりないわけけど、でも紙の保険証は容赦なくなっちゃんうわけだし（泣）。あと若い世代と中高年の時代に対する温度差とかね。そういうポイントをしつかり押さえていけば、じゅうぶんに現代的で面白い作品になると思っています。

——キャストの皆さんについてはいかがですか。

年になりましたね。基本的に地域で作品をつくるのは大好きです。東京だと稽古場までの移動にへたすると1時間半くらいかかるから、往復で3時間はつぶれてしまう。それが地域の場合は稽古場まで10分とかね、自分の時間がたっぷりあるから気持ち的にすごく余裕ができる。創作だけに集中できる環境ですよ。俳優たちも稽古場通勤のストレスがなくて、みんなリラックスして取り組むから当然その空気感には芝居の中にも出てきます。それは滞在制作をしてると、いつも感じることですね。

——松本にいらっしゃったことは？

一度だけ、新婚旅行で。でも松本城を見たのと「蕎麦食べたなあ」ぐらいの記憶しかない（笑）。まだ「まつもと市民芸術館」もなかったころです。だから作品を呼んでくれればいいのになってずっと思っていましたけど、なかなか縁がなかった。まだ建物も見えないもの（笑）。だから今回はうれしいですよ。あと、もう亡くなつ



静岡県出身。劇作家・脚本家・演出家。同志社大学文学部卒業。劇団 M.O.P. (1984～2010) 主宰。主な受賞に、97年『東京原子核クラブ』で読売文学賞、01年『赤シャツ』(作)『黒いハンカチーフ』(作・演出)で紀伊國屋演劇賞個人賞、新国立劇場『怒濤』(演出)で読売演劇大賞優秀演出家賞・作品賞、『高き彼物』(作)で鶴屋南北戯曲賞、08年『殿様と私』(作)で読売演劇大賞作品賞、11年『ローマの休日』(脚本・演出)で菊田一夫演劇賞、22年『昭和虞美人草』(作)で芸術選奨文部科学大臣賞、同年秋、紫綬褒章など。

升毅さんと一緒にするのは2度目かな。15、16年ぶり？ 殿様役はどうしたって人品骨柄に説得力がないとダメですからね、誰でもいいってわけにはいきません。その点、升さんなら雰囲気ありますからね。殿様と正面から渡り合うアン役にも、今度は堂々とした西洋婦人の雰囲気が必要なので。だから升さんと元宝塚のトップスター・水夏希さんというのは絶妙なキャストिंगだと思えますよ。まあ、他の方々も一人一人かなり吟味してオフアールしましたからね。どなたもこれ以上ないというベストな配役になっていると思います。その中でも個人的には家令の難田役の松村武君が楽しみ。この役は初演の文学座では加藤武さんが演じてくださった。松村君はずっと若いんだ

ちゃったんだけど、松本出身の大家仁志くんという素敵な役者がいて、俺の芝居には欠かせない存在だったんだ。あいつのお墓も松本にあるのかな。あるのならお参りに行こうかな。

**異文化同士の出会いから、
デジタル技術による分断へ**

——『殿様と私』は2007年に文学座に書き下ろされたわけですが、書かれたきっかけを教えてください。

まあ、駄洒落だよ、最初は（笑）。昔ブロードウェイで『王様と私』を観たんですよ。こっちは英語ができないからストレートプレイだとよくわからなくて、ちよつとこつ萎縮する感じになるんで、それまであまり観てなかった有名なミュージカル作品をけっこうたくさん観たのね。で、『王様と私』だと、シャムの王様が主人公なわけだけど、留学経験があるからふつうに英語をしゃべるんだよ。異文化同士の出会いがモチーフの話なのに、家庭教師のアンナとふつうに会話ができるっていう、それがなんかもう観ててシャクでさ（笑）。だから『殿様と私』ってことにして、日本のお殿様だったら絶対に英語なんかしゃべれないからさ、「もう話を通じ合わないことおびたたいぜー」って芝居を書いてやろうと思ったわけ。まあ、それはそれで愉快な展開になるんじゃないかなと。

ど、たくまざる可笑しみというかね、大真面目にやるほど笑えるという稀有な俳優さんですし、とても楽しみです。

——お客様にメッセージをお願いします。

まあ、駄洒落めいたタイトルから思いついた芝居なので当然なんだけど、この芝居にタイトルをつけるとしたら、もう本当に『殿様と私』以外にないよね。そんなタイトルの芝居があったら観てみたいとふつうに思わないですか？ 俺だったら観たいなあ、くだらなくて愉快そうじゃない？ まあ、殿様の家の話ですからね、下々にはわからない、おとぎ話的な部分もあるし、全体的に楽しいお芝居ですので、難しいこと考えずに気楽にいらしてください。

MAKINO NOZO MI INTERVIEW

土田英生
台本創作ワークショップ
「なるほど」から「劇」

「ひらいていく劇場」まつもと市民芸術館では、さまざまなアーティストを迎え、市民の体験ワークショップも広く実施しています。2024年度の様子を紹介します。

Stage Photo: Takeshi Hirabayashi

栗山民也
短期集中演劇
ワークショップ

2024年9月17日(火)～9月20日(金)

日本を代表する演出家・栗山民也による一般向けワークショップは、沖繩と松本だけでなく希少な機会です。名だたる俳優が一緒に作品をつくりたい」と憧れる存在でもあるだけに、プロの俳優にとっても垂涎ものの企画。男女5名ずつの参加者は10代から50代まで、松本に移住したばかりの夫婦、まったく演劇経験のない方などに混じり、俳優としてすでに活動している方、さらにはフランスからやってきたジャック・ルコック国際演劇学校で学んだ方など、多様な顔ぶれが集まりました。

テキストは、故・井上ひさしの『少年口

伝隊一九四五』。一発の原子爆弾が広島の上空で炸裂、かろうじて生き延びた英彦、正夫、勝利の3人の少年は、やはり運よく助かった花江の口利きで中国新聞社に口伝隊として雇われ、人々にニュースを伝えていくうちに大人たちの身勝手な論理とこの世界の矛盾に気づいていく、という物語。言葉の奥にある情景などをしっかり読み解くために、句読点の意味、セリフの抑揚やアクセントまで、徹底的に参加者とともに考えていくという内容でした。



左/台本を指導する土田英生 右/朗読劇『となりのテーブルは青くない』より

2024年5月10日(金)～6月8日(土)

京都を拠点とする人気劇団「MONO」の劇作を手掛ける土田英生を講師に行われた「台本づくり講座」。今回は多数の応募者から、20～60代半ばまで幅広い背景を持つ方々8名を選出。「会話(台詞)と行動(ト書き)だけで表現する」戯曲のコツを学び、短編戯曲にチャレンジ。テーマは、「松本のとある喫茶店で同時に起こったこと」で、男女4人を登場人物の上限に、10分程度の架空のやり取りを書き上げました。それぞれが喫茶店内の窓際、入口付近など8つの席を担当し、事前にこんな物語を書きたいと宣言していたこともあり、バラエティに富んだ内容になりました。

8月24日(土)には、オープニングとエピローグ、8つの戯曲をつなぐ店員の会話を土田が書き、朗読劇『となりのテーブルは青くない』として披露されました。松本市出身の秋本奈緒美、演劇ユニット*pnish*所属の土屋佑彦、シアターランポンの草光純太、塩尻市出身でMAO WORKSの田村真央というプロの俳優4人によって立ち上がった物語を参加者はどのように感じたでしょう。その後、何人かは戯曲のコンテンツに応募したとのこと、ワークショップが刺激になったことは違いありません。



講師の山田うん



栗山(前列、右から3人目)と参加者たち

山田うんによる
ダンスワークショップ
必ずやるべきよ！
2024秋

2024年10月24日(木)・10月25日(金)

まつもと市民芸術館では、『ノクターン』『オパケッタ』などの公演を行なっているダンサー、振付家の山田うん。2008年からCo.山田うんに参加し、先日のひびのこづえ ダンスパフォーマンス『UP AND DOWN』にも出演した川合ロン。二人を講師に迎えたダンスワークショップは、16歳以上の「ビギナー」、4歳～9歳のお子さんと保護者で参加する「おやこ」、9歳以上のお子さんから大人までを対象にした「ジュニア+ビギナー」の3クラスを用意。

「おやこ」では多くがお母さんとお子さんの組み合わせでしたが、お父さんも3名が参加。皆さんで列をつかって電車のように移動したかと思えば、トンネルをつくっては代わりばんこにくぐったりしながらスタジオをグルグルと回ります。おなじみのアニメやワクワクする童謡に合わせ、スキンシップを重視したワークを繰り返し、45分ほぼノンストップで楽しい、笑顔の止まらないひと時となりました。「ジュニア+ビギナー」では一転、身体のある部分を動かすと意外な箇所に負荷がかかることを確認するなど身体の仕組みを意識しながら、自由な動きの表現を楽しむような内容でした。山田&川合のコンビで長く練り上げたワークショップのひと時は、まるで参加者との一期一会でつくり上げた作品を見ているような気持ちになりました。



講師の川合ロン

公演情報はぬり絵の後にも掲載しています

1月25日発売

バルコ・プロデュース2025
東京サンシャインボーイズ 復活公演
『蒙古が襲来』

3月21日(金) 18:00/
22日(土) 13:00、18:00/23日(日) 13:00
主ホール

作・演出：三谷幸喜

出演：

相島一之 阿南健治 伊藤俊人
小原雅人 梶原善 甲本雅裕 小林隆
近藤芳正 谷川清美 西田薫 西村まさ彦
野仲イサオ 宮地雅子 吉田羊

料金：全席指定(税込)
¥11,000

※未就学児入場不可



シールをはるところ

シールは「まつもと市民芸術館」でもらえるよ(先着500名)

2月1日発売

『マスタークラス』

3月29日(土) 19:00/30日(日) 14:00
主ホール

作：テレンス・マクナリー

翻訳：黒田絵美子

演出：森新太郎

出演：

望海風斗 池松日佳瑠 林真悠美
有本康人 石井雅登 谷本喜基

料金：全席指定(税込)
一般 ¥10,000

※U25(¥6,000)の
チケットをご希望の方は、
チケットぴあでお求めください。
※未就学児入場不可



『Catwalk/ねこあるき』は、まつもと市民芸術館の広報誌です。『Catwalk』は芸術館の情報、『ねこあるき』は街の情報を中心に紹介し、両側から読めるようになっています。またCatwalk(=キャットウォーク)とは、劇場のステージや客席の上のスタッフしか歩くことのない細い回廊のことを言います。

『Catwalk/ねこあるき』Vol.5

2025年1月1日発行

発行 まつもと市民芸術館

〒390-0815

長野県松本市深志3丁目10番1号

Tel 0263-33-3800 Fax 0263-33-3830

E-mail mpac@mpac.jp

URL <https://www.mpac.jp>

編集 いまいこういち(『engawa』)

デザイン 清水貴栄・小林慎太郎

印刷 藤原印刷株式会社

※禁断転載

■郵送サービス

『Catwalk/ねこあるき』の郵送をご希望の方は、郵送費用分の切手(1号180円)を下記へお送りいただければ送付いたします。その際、お名前・ご住所・何号をご希望かを必ずご明記ください。

〒390-0815 長野県松本市深志3丁目10番1号
まつもと市民芸術館 広報誌担当 宛

『Catwalk/ねこあるき』は、まつもと市民芸術館のほか、市内公共施設、市内飲食店、全国の劇場施設などに置いてあります。

■チケット購入・お問い合わせ

【まつもと市民芸術館チケットセンターのご案内】

①電話 0263-33-2200(10:00-18:00)

②インターネット <https://www.mpac.jp>

(要事前会員登録・無料)

③窓口 芸術館1階(10:00-18:00)

【芸術館チケットクラブのご案内】

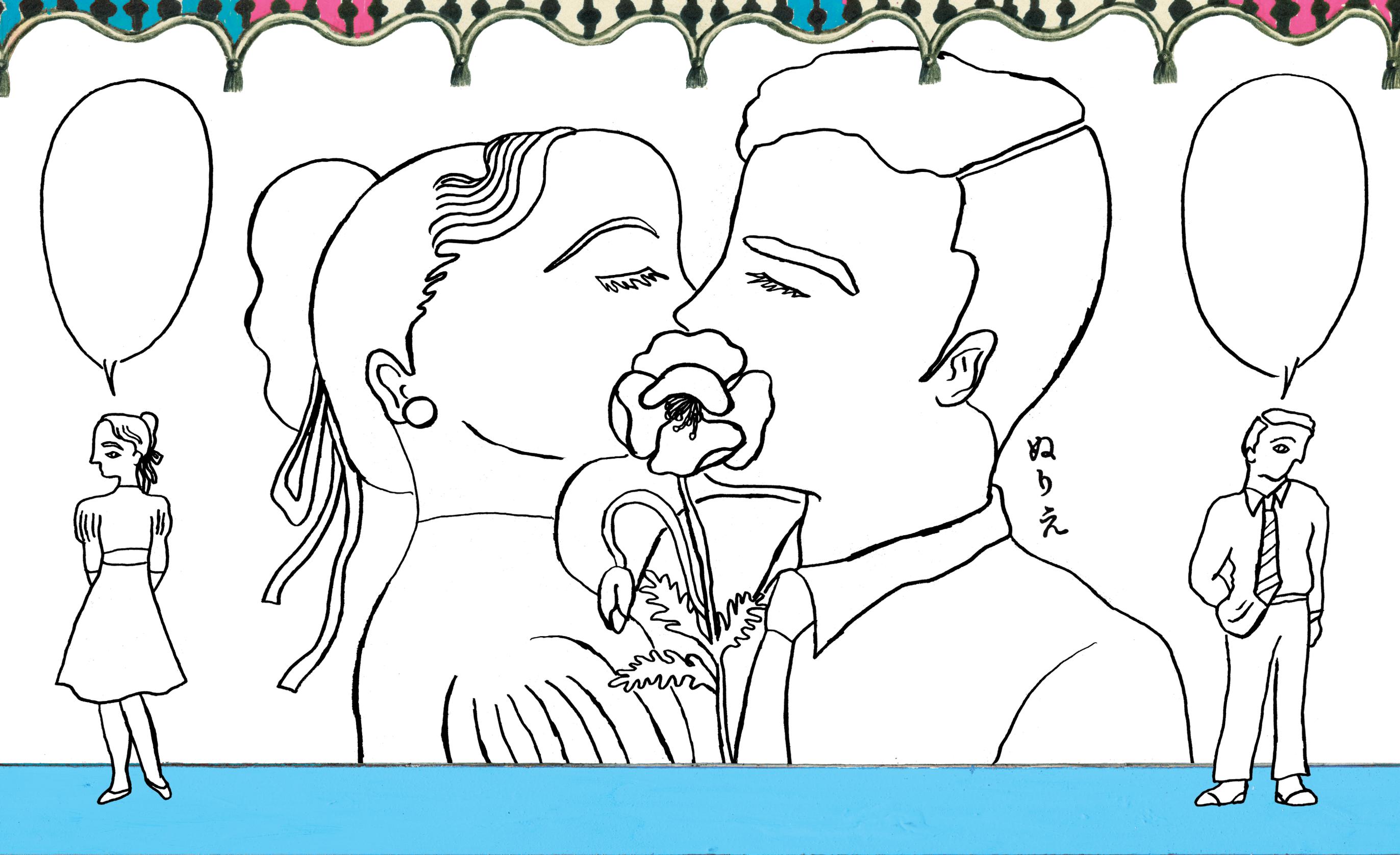
※まつもと市民芸術館ホームページよりご登録ください。
※インターネット予約が可能(一部公演をのぞく)。
※メールマガジンにて最新のチケット情報や公演案内を配信。
※ご希望の方には、スケジュールガイド、公演チラシを送付。

■アクセス

【バス】JR松本駅お城口(東口)より、駅前バスターミナルから「市民芸術館前」下車

【徒歩】JR松本駅お城口(東口)から「あがたの森通り」を東へ800m、徒歩10分

※駐車場の用意はございません。
公共交通機関や有料駐車場をご利用ください。
※近隣商業施設等への無断駐車は他のお客様のご迷惑になりますのでご遠慮ください。



ここは「つぎの劇場」です。役者たちに色とセリフがまだついていません。

つぎを かいて 劇を 完成させてください。完成できたら 金メダルシールを もらえます。

SIDE

A

B

発売中

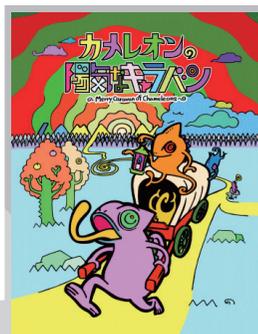
シアターパーク企画
『カメレオンの陽気なキャラバン』

1月17日(金) 18:00/18日(土) 14:00
主ホールホワイエ

出演:
草光純太 細川貴司 下地尚子 深沢豊
荒井正樹 堀田康平 (シアターランボン)

料金: 全席自由 (税込)
一般 ¥1,000/U25 ¥500

※3歳以下のお子様は、保護者1名につき1名まで膝上鑑賞無料。
席が必要な場合はチケットが必要です。
※U25チケットは枚数限定・前売のみ。
また当日年齢確認をご提示ください。



発売中

シアターパーク企画
『まつもと、景の声』

2月8日(土) 15:00/9日(日) 15:00
2階 オープンスペース

構成・演出: 藤原佳奈
出演: 下地尚子 玉井夕海 (渋谷知らず) 他

料金: 全席自由 (税込)
一般 ¥1,000/U25 ¥500

※未就学児入場不可
※U25チケットは枚数限定・前売のみ。
また当日年齢確認をご提示ください。



発売中

チャオ!バンビーニ2025冬
『ローリーの怪奇骨董お話し箱』

2月2日(日) 13:00、16:30
実験劇場

出演: ROLLY

料金: 整理番号付自由席 (税込)
一般 ¥3,000/U25 ¥1,000

※3歳以下入場不可
※U25チケットは当日年齢確認をご提示ください。

おやこ券 ¥3,500 (正価 ¥4,000のところ)

※前売券及びまつもと市民芸術館
チケットセンターのみ取扱。
※おやこ券は、
一般: 1名+U25: 1名の
ペア券です。2名様一緒に
入場してください。
※予定枚数に達した時点で
販売終了となります。



発売中

まつもと市民芸術館プロデュース
『殿様と私』

2月13日(木) 18:30/14日(金) 14:00
15日(土) 13:00、18:00/16日(日) 13:00
小ホール

作・演出: マキノノゾミ
出演:

升毅 水夏希 久保田秀敏 平体まひろ
武居卓 喜多アレクサンダー 水野あや 松村武

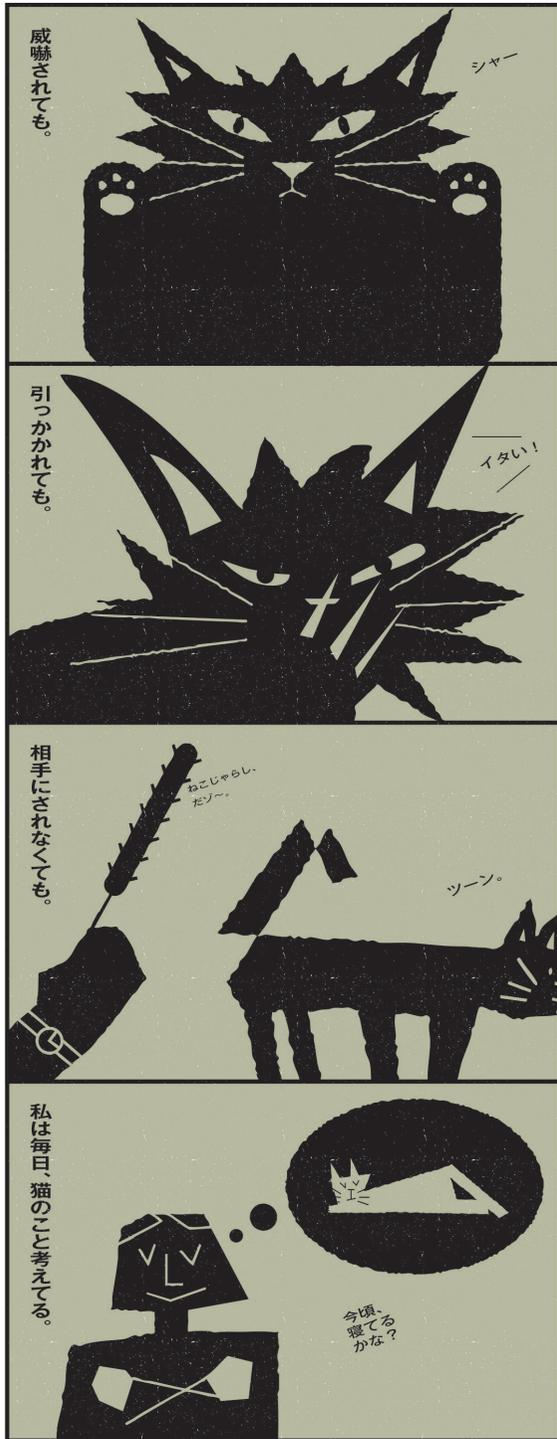
料金: 全席指定 (税込)
一般 ¥5,500/U25 ¥2,000

※未就学児入場不可
※U25チケットは
枚数限定・前売のみ。
また当日年齢確認を
ご提示ください。



それでも、猫が好き。

小島 有



小布施町で、グラフィックデザイナーと本屋の活動をしている小島有です。猫って本当に可愛い。毎日3時間くらい戯れていたいです。漫画を通して猫愛を伝えていけたら、と思っています。



倉田翠芸術監督が松本少年刑務所で一日所長に!

松本少年刑務所では、10月12日(土)に第26回松本矯正展が開催されました。全国の刑務所で受刑者が製作したバッグやまな板、木工製品などが格安で販売されることから、毎年、多くのお客様で賑わっています。また普段は立ち入ることができない刑務所内を見学できる刑務所見学ツアー、刑務所カレーや刑務所パンの販売も人気です。さて、今年はなんと、倉田翠芸術監督【舞踊部門】が、1日所長として参加しました。倉田監督の制服姿、凛々しいです。

「刑務所の中の鏡の上に、容姿端麗と掲示されているんですけど、刑務官の皆さんはものすごく身だしなみに注意されているんですよ。丈とかサイズもぴったりの制服を着られている。それは受刑者たちから見たときに隙がないように、だらしないように、という意識からなんだそうです。制服はもちろん初めて着せていただきました。ネクタイは巻いているのではなく、すぐに取りれる仕組みになっているとか、役職によって帽子の線が違うとか、いろいろ教えいただきました」

この貴重な体験は、倉田監督が、松本少年刑務所で受刑者の皆さんと身体表現のクラブ活動をスタートした縁でお声がけいただきました。倉田監督は、ある日のXにこんな投稿をしています。「みんなの身体の集中力が高まっているので、ちょっと動いてもらおうとすごい。何か俗に言う技術?を教えたわけではないんだけど。まあ、これも技術なのかもしれないが。見せられないのが残念だけど、とりあえず私たちはこの時間をちゃんと覚えとくと、やりがいを感じているようです。」



芸術館ゆかりのアーティストが選んだ 松本うまいもん

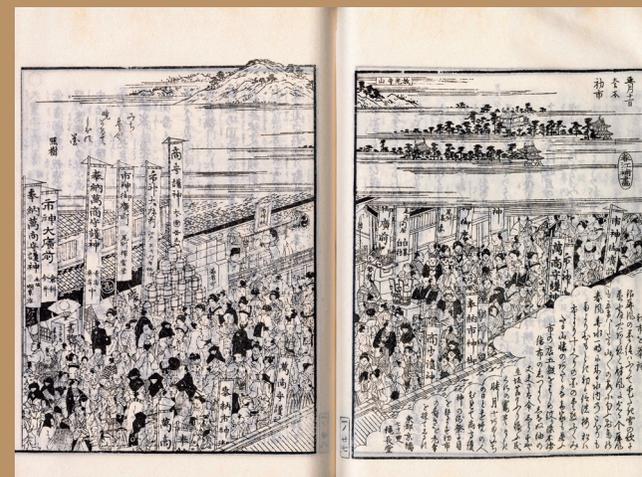
2019年の『K. テンペスト』にアントーニオ役で出演した松村武さん。「意外と呑み相手がなくて、スーパーのお惣菜で一人呑みする日が多かった」そうだが、そのお供になっていたのが、「からしいなり」。「いなりの甘さと辛子の絶妙なバランス。なんか東京駅地下でどこどこ名物みたいに並んでいてもおかしくない個性なのに、スーパーの惣菜としてさりげなく売られている風情!」が気に入った理由。甘く煮た油揚げに、酢飯を詰めた「いなり寿司」だが、「からしいなり」は油揚げが裏返し、しかも内側に黄色のからしが塗られている。筑摩神社で神事に合わせて売られる「筑摩からしあげ」にはそのルーツでは?との説もあります。2月には『殿様と私』で再び松本にやってくる松村さんですが、今回も「からしいなり」を堪能されるのでしょうか?



松村武(俳優)



新春の風物詩、 松本あめ市はこんな催し



「善光寺道名所図会初市の図」(松本市立博物館所蔵)

中山道本洗馬から善光寺道の各宿駅を経て善光寺に至り、そこから北国往還を江戸に向かい、碓氷峠に至る間の各宿場の名所旧跡を記録した「善光寺道名所図会」(1849刊行)に、松本あめ市は掲載されています。江戸時代前期、1月11日に市始めの行事の際に、市の神様を祭っていた宮村天神(現在の深志神社)の神主が塩を売ったのを「塩市」と呼ぶようになったことが今日の「あめ市」の起源とされています。また、江戸時代後期には、戦国時代に上杉謙信が敵将・武田信玄に「義塩」を送ったとされる「謙信の義塩」伝説と結びつき、松本の地に「義塩」が届いたと言われる1月11日を記念して開催された「塩市」が「あめ市」の起源とする説もあるようです。「あめ市」当日には、全国あめ博覧会・即売会、七福神があめを配りながら中心市街地を練り歩く「時代行列」などが今日も行われています。

参考: 松本市ホームページ

「文化芸術が街を輝かせる」第5弾はNPO法人コミュニティシネマ「松本CINEMAセレクト」理事長・宮崎善文さんの登場です。松本CINEMAセレクトは独自の選定による上映会で、芸術館をもっとも利用している団体の一つ。かつては映画の街だった松本市も、一時は映画館が一つのみという状況でした。そんな栄枯盛衰を横目に、山形村の見性寺ご住職の傍ら上映活動を続けてこられました。

——松本CINEMAセレクトは、年間80枠近く小ホールで上映会を行なっているヘビーユーザーです。芸術館とはどんな出会だったのでしょうか？

2004年、芸術館主催の『映像の魔術師・寺山修司の幻想的でカルトな全実験映像作品を一挙上映!!』で、寺山の実験映画を完全再現した時です。代表作の「トマトケチャップ皇帝」を始め、観客が次々にスクリーンに釘を打つ「審判」、スクリーンの中の女性たちに挑発されて客席から映画の中に飛び込んだ男性客が、裸にされ、すごすごと現実世界に戻ってくる「ローラ」など。アングラ演劇もよく観ていたから楽しかったですよ。

——宮崎さんはどのように映画にのめり込んでいったのですか？

もともと親が好きだったの。うちのお寺では11月の行事「お十夜」で、法要の前に『法然上人物語』とか「にっぽん昔話」とか子どもたちに8ミリを回して観せていた。中学になると友達と映画館に出かけるようになって、縄手通りの中程にあった中劇に通い始めたんだ。ここはロードショー館のほかに36席のシネサロンがあったり、ロビーを開放していたから文化人が出入りしていて、大人たちからいろんな話を聞いたよ。映画とは腐れ縁みたいなもの。落ち込んだときは映画に助けってもらったし、中劇がなかったらどうなっていたか。

シネサロンは1週間ごとに作品が変わる名画座。金曜日はポスターの張り替えを手伝い、ポスターやスチールをもらっていた。高校の終わりにはバイトで映写や番組編成も手伝った。東京の大学に進んだ後も休みのたびにバイトに来ていたけれど、卒業したタイミングで映写技師の方が亡くなられて、中劇に就職することになったんです。

——80年代のミニシアターブームのころですね？

そうだね。松本には12スクリーンあったけど、単館系の映画をかけるミニシアターはなかった。シネサロンは名画だけでなく長野県で唯一アート系作品も上映していた。その興行が跳ねた後をお借りしてレイトショーを始めたの。シネフレンドというサークルや友達と架空の団体をつかって上映会もやった。その流れで

宮崎さんのジャン＝リュック・ゴダール監督のコレクション。フランス版のポスターの一部で、60年前のものもある。パリに行ったとき買ったものや、ネットで探して購入したものもあるそう。



松本CINEMAセレクト名義での上映を始めたんです。1989年のこと。ところが中劇が2004年に突然閉館して上映場所を失ったわけ。その後はみどり町のエンギザを借りて月に3、4回のレイトショー、Mウイングでも上映会をしていた。でも2010年にエンギザもなくなりました。話したいことは山ほどあるけれど、もう大変でしたよ。

——1960年代には6つの映画館があった。それが2000年代には立て続けに閉館して、中心市街地から映画館がなくなったんですね。

中劇もエンギザも前日まで自主上映をやっていたのに。そのころコミュニティシネマが日本で始まり、上映システムもフィルムからデジタルに移行し、空き店舗を改装したり、新しい形の映画館が各地にできた。今、松本にそういう場がないのは、僕のせいだよ。周りは場所を希望したけど、僕は小屋を持つことが怖かった。そこで公共施設を使うことを選び、芸術館が主要劇場になったんだ。芸術館がある場所は、かつて深志公園だった。1911年に初めて松本で「キナパーク」という常設の映画館ができたところなんです。芸術館の事務方、舞台のスタッフの方もいろいろと私のワガママに付き合ってくれながら一緒に松本の映画文化娯楽の起源の場所で映画を屈けているんです。

——宮崎さんはなぜここまで自主上映を続けられたのだと思いますか？

一番は自分が映画の近くに居たいこと、多種多様な映画と出会える「場」の提供。そしてシネサロン時代から、日本のインディーズの人たち、若い監督の作品を積極的に紹介してきた。それが一番の楽しみ。地方のミニシアターはスクリーンが小さい。芸術館の大きいスクリーンでかけるとゲストの監督たちはすごく喜んでくれるよ。

——これからやっていきたいことはありますか？

生涯年収の3分の2を映画につぎ込んだよ。大切な人とも映画を通して出会った。赤字もあるから簡単に法人も解散できないけど。いつまでもあると思うな、CINEMAセレクトですよ。松本の旧市内に映画館がなくなった後、イオンシネマさんが来てくれたときはうれしかった。街中に映画館がないと、中・高校生がデートで映画を観られない。映画館に高校生がいっぱいいる風景はいいよね。郊外型の映画館には子どもたちだけでは気楽に出かけられない。日常生活で映画を観る環境がようやくでき上がった。そして僕らの周りから映画監督や俳優、配給会社の社員や映画関係の学芸員になる人が出てきた。もちろんそれぞれの努力だけど、中劇やシネサロン、CINEMAセレクト、そして僕の名前も出してくれる。それを聞くと何か映画に恩返しできているのかなと思う。これからも映画を観せて人生を狂わせてやろうと思うんだよ（笑）。



山形村にある見性寺の本堂で、8ミリを回してみせてくれた宮崎さん。



杉本さんが手がけたギターを使うアーティストの記事が壁に並んでいる。

が、音に影響はありませんか？

杉本 どこに装飾を付けるかによりますね。でも振動が大事というのは、その通りです。私も実際につくり始めるまでは、電気周りの装置が重要だと思っていましたが、実際は木の振動をどうコントロールするかのですね。

石丸 そういう意味ではヴァイオリンなどの弦楽器と共通する部分もあるのでしょうか？ クラシックの楽器は、長い年月をかけて今の形になりましたが、エレキは今も進化中に見えます。

杉本 時代とともに音楽もどんどん変化しますよね。そこで求められる音は、これまでいいとされてきた音ばかりではない。自分がいいと思う音を、アーティストたちは探しているんだと思います。

石丸 つくり手としても創意工夫のしがいがありますね。楽器好きとして、エレキにはいろいろな「顔」があるのが面白いと感じます。

杉本 マイケル・ジャクソンが来日したときに、ギタリストが私のつくったギターを使ってくれていたんですが、演出的に「この場面では黄色いギターが必要」と指示されたそうです。

石丸 本当にさまざまな色や形があって、ステージ衣装のような役割も果たしているんですね。

杉本 腕時計のような感覚なのかもしれません。私のところにも何本も注文してくれる人が多いです。

石丸 ギタープレイヤーはものすごい数の楽器を持っていますよね。本数を聞くとびっくりするくらい。

杉本 うちのかみさんも言ってますよ、「手は2本しかないのに」って。

石丸 今後は会社をどうしていきたいなど思いはありますか？

杉本 ずっと継続するブランドでありたいですね。松本は職人さんが多いでしょ。そうすると職人の動で作業してしまうから、新しく始める人はまたイチから始めなければならない。うちでは、少しずつデータをデジタルで残すことにも取り組んでいます。

石丸 そういう方面でも最先端ですね。聞いていてワクワクします。

杉本 一人の作家として名を残すのではなく、ヴィンテージと呼ばれるような製品を残したいんです。音楽でも、誰がつくったかわからないけれど誰もが口ずさめる曲ってあるでしょう。そういうものに憧れます。

石丸 たしかに、歌い継がれる名曲というのは、個人の作品を超えてみんなの文化という感じがしますね。今日お話を聞いていて、僕たちが芸術監督を務める芸術館も、これまでのストーリーを大事にしながら、市民の方々から愛される「みんなの芸術館」と思ってもらえるようにできたら素敵だなと感じました。

杉本 素晴らしいと思います。僕も年齢のせいか、自分のことだけではなく、産地・松本について発信することも大事にしたいと思うようになりました。

MEET & TALK

with "Matsumoto"

芸術監督3名が街に飛び出して市民の皆さんと語り合う企画の第5弾。今回は、ゼネラルアートアドバイザーの石丸幹二が、『SUGI GUITARS』のブランドで世界中にファンを持つエレキギター・ビルダーの杉本眞さんを訪ねました。実は松本は知る人ぞ知るギターの産地。そのトッププランナーの一人として、パット・メセニーやスティングなど、数々のアーティストのギターやベースを手がけてきた杉本さん。今まさにギターが産まれつつある杉本さんの工房「スギ・ミュージカル・インストゥルメンツ株式会社」で、石丸がギターづくりの歴史を聞きました。

石丸 松本は日本一のギターの産地だと聞き驚きました。僕も音楽に関わるものとして、松本産のギターを多くの人が手にしてくれるというのはうれしく思います。先日、芸術館に公演でいらしゃったギタリストのROLLYさんが、「次に松本に行くときは、信州ギター祭りに合わせてだな」と話していました。

杉本 ROLLYさんのギターも昔つくりましたよ。「信州ギター祭り」は島村楽器さんのお声がけで始まったのですが、今はSNSもあって、評判を見ていろいろな地域から駆けつけてくれますね。前回も横浜から来た人が「普段は東京や横浜で買っているけど、今回は本場で」と言ってくれました。

石丸 「本場」ですか、いいですね！ 国内生産の半分以上を松本市が占めると聞いていますが、ファンには聖地として認識されているんですね。

杉本 そうなんです。以前うちを週刊誌が取材してくれたときも、まさに「エレキギターの聖地・松本」と書いてくれて誇らしかったですね。海外の有名ブラ

ンドをOEM（委託者のブランドで製品を生産すること）で生産していたこともあり、1980年代にはヨーロッパに輸出されるエレキギターの約7割が松本産だったと聞いていますよ。

石丸 7割！ 想像以上です。松本は昔から家具生産などの木工業が盛んだったそうですが、そのことも関係しているのでしょうか。

杉本 乾燥した気候が木工に合っていることも要因だと思います。だからクラフトフェアまつもとも木工製品の出展も多いでしょ？ 塗装などの職人さんも多いですね。大手楽器メーカーさんも塗装は松本でやっているところがたくさんあります。

石丸 以前、ピアノの生産現場を見学したときに、出荷する国によって木材の種類を変えていると聞きました。

杉本 気候は大事ですね。ツアーでいろいろな場所をめぐるアーティストも多いですが、特に湿度は大敵です。ギターの加工工程では常にビニール袋に入れて管

杉本 眞 Makoto Sugimoto

ギター製造に携わっていた両親の影響で楽器づくりを始める。大学在学中の1976年に単身渡米し、ギター・リペアのアルバイトを開始。徐々にギター製作に気持ちが傾きはじめ、翌年帰国。1978年ギターの製造を生業とすることを決意し、自宅近所にオープンしたフジゲン株式会社に入社。数多くのギター制作の経験を生かし、2002年6月に叔父の塚田充生氏と共に、オリジナル・ブランド「Sugi Guitar」としてエレキギターの製造を開始。世界で愛される高品質なギターをつくり続けている日本のトップビルダーの一人に。

石丸幹二 Kanji Ishimaru

東京音楽大学音楽学部器楽科にてサクソ、東京藝術大学音楽学部で声楽を学ぶ。東京藝術大学在学中の1990年、劇団四季に入団し、看板俳優として活躍（2007年退団）。その後は、大型ミュージカルなどの話題作の数々に主演、映像ではドラマや映画出演のほか吹替、司会など幅広く活躍している。歌手としてもオーケストラ・コンサート、クリスマス・ディナーショーを開催しているほか、「with FRIENDS」（2024年11月6日発売）などCDも多数リリース。2024年度より、まつもと市民芸術館芸術監督団ゼネラルアートアドバイザーに就任。



上/工房でもギターの部品がビニール袋に入れられている 右/5大湖のメイプル材



理しています。そうすることで空気の移動をなくし、木の動きを最小限にしています。クラシックギターみたいに10年かけて天然乾燥できればそういうことは起きづらいんですけど。

石丸 制作段階での乾燥が重要になってきますね？

杉本 そう。たとえば、これはアメリカの5大湖の底に200年間沈んでいたメイプル材なんです。

石丸 実物ですか！ 200年とはスケールがすごい。

杉本 ずっと水中にあったので乾燥をどうするかが問題でした。何とかなったと聞いた3日後には僕も買い付けに現地へ飛んでいましたよ。うちでは今もこれを使っています。

石丸 貴重な天然木ということですよね。

杉本 5大湖だと水温も低くて保存にも適していたんです。さらに200年のうちに水中の細菌が細胞内の不純物を食べてしまうため、工業試験場の試験ではこの木材は軽い上に音の伝達率も30%ほどアップし、気候の変化にも反応しづらいというデータが出ました。ギターのネックは動きづらいということです。

石丸 そんな効果が！ 今日は知らないことがたくさん伺えますね。やっぱりメイプルが多いんですか？

杉本 ギターはヴァイオリンの知恵を引きずっているところはありますね。でも、音の振動のために表面をスプルース（白に近い明るい木材）にするというようなことはしません。うちでは、だいたい40種類くらいの樹種を在庫しています。

石丸 そんなにあるんですね。マホガニーなどはよく聞かれますが。

杉本 木の種類もありますが、育つ場所でも異なります。同じ木でも材の取り方によっても柄が全然違いますよ。

石丸 貴重な天然木ということですよね。

杉本 5大湖だと水温も低くて保存にも適していたんです。さらに200年のうちに水中の細菌が細胞内の不純物を食べてしまうため、工業試験場の試験ではこの木材は軽い上に音の伝達率も30%ほどアップし、気候の変化にも反応しづらいというデータが出ました。ギターのネックは動きづらいということです。

石丸 そんなにあるんですね。マホガニーなどはよく聞かれますが。

杉本 木の種類もありますが、育つ場所でも異なります。同じ木でも材の取り方によっても柄が全然違いますよ。

—— 独立したころはメイド・イン・ジャパンのハンドメイド・ブランドがなかった

石丸 杉本さんは若いころにアメリカでギターのリペアをされていたとか？

杉本 大学在学中の22歳ごろのことですね。

石丸 それがギター職人としてのキャリアの始まりですか？

杉本 その時はただ音楽が聞きたくて。ロスやフィラデルフィアを拠点にアメリカ中を旅しました。ギター

工場にも行って「ここで働かせてください！」って。
石丸 すごいバイタリティ。若いっていいですね。
杉本 若さしかない、てのがいいんです（笑）。帰国後、1978年から本格的にギターづくりを始めますが、今や私も現役製作者としては最年長者の一人となりました。

石丸 もうすぐ半世紀。素晴らしいですね。その間ずっと世界中からギターのオーダーを取り続けられたというのもすごいです。

杉本 見た目や音には好みがありますから、その楽器にどんなストーリーがあるかが大事なんだと思います。海外のハードロックカフェには、今でも私のギターが飾られているところもあって「これはあの時つくったやつだな」なんて自己満足してます。

石丸 背景にある歴史や、つくり手の想いを知りたいというのはわかる気がします。

杉本 私が独立したときはまだ、メイド・イン・ジャパンでハンドメイドのブランドが珍しかったこともあります。今は増えましたが「工場上がりでブランドを成功させたやつはないから頑張ってくれよ」と前職（フジゲン株式会社）の上司も背中を押してくれました。

—— アーティストは自分がいいと思う音を探し、職人がその思いを実現する

石丸 先ほど、いろいろな製品を拝見しましたが、もはや芸術品ですね。残念ながら僕はギターを弾けないのですが、家に飾っておきたくなるほど美しい。ボディに布を貼っているものもあるんですね。

杉本 そうです。過去には加賀友禅文化協会さんからの依頼で加賀友禅を使ったこともあります。

石丸 エレキギターに伝統の染物が使われているとは驚きです。こちらのコウモリのロゴマークは蝶紐？

杉本 そう、タヒチアン・ブラックパールですね。ベースにはテレビでアーティストの手元がクローズアップされたときに見えやすい位置に入れてあります（笑）。

石丸 さまざまな素材が使われるんですね。エレキギターといっても楽器なので振動が大事だと思うのです



左/タヒチアン・ブラックパールを使ったコウモリのロゴ 下/工程ごとに専門スタッフが



楽都・松本はギターの産地でもあった！
世界的なエレキ・ギタービルダーに迫る！！



清水貴栄さん（アートディレクター）

高校生の時に何度も通った松本PARCO。とっても刺激的な場所でした。売っている商品だけでなく、そこで働く人やそこに出かける人、みんなが影響を受けた空間がそこにはあって。行けば必ず自分の感性に響く、そんな場所でした。ダンサーのアオイヤマダさん、カメラマンの磯部昭子さん、メイクアップ・アーティストの富沢ノボルさんと、松本PARCOのポスターを作りました。松本PARCOに影響を受けたこのチームが作り出す作品が、松本の新しい世代の感性の刺激になって、それがまた次の世代に続いていく。松本PARCOがこの場所にあったことの証になる、そんな作品を目指しました。



佐藤玄さん（PARCO演劇事業部）

高校を卒業して、私が松本を離れ、京都の大学に進学した後に、松本PARCOがオープンしました。「松本にPARCO！大丈夫かこの会社？」と思ったのを覚えています。僕がそのPARCOに入社し、5年目からは演劇事業部に配属され100本以上の作品をプロデュースさせていただきました。転職もせず、ずっと30数年お世話になり、定年再雇用でまだにお世話になっています。演劇を通して勝手に松本に恩返しし、故郷に錦を飾るつもりで、まつもと市民芸術館ではたくさんの公演でお世話になっています。ありがとう、松本PARCO！

※次回は、3月に東京サンシャインボーイズ復活公演『蒙古が襲来』を予定しています（公演情報は16p）



バックステージのホワイトボードを使って出演者やスタッフを盛り上げてきました。

「ありがとう松本 PARCO」 関連イベント



インスタグラム「ありがとう松本PARCO」ありがとう松本PARCOスナップと銘打って、松本PARCOに想いのあるさまざまな皆さんの感謝の言葉を掲載しています。（@thx.mparco）



11月22日（金）～12月8日（日）
「SLOW WALKING OTAMAイラストレーション」まつもと市民芸術館の広報誌『Catwalk／ねこあるき』のために描いた絵と文章、そして新作など17点が展示・紹介されました。



12月18日（水）～12月22日（日）LIVE
ライブハウス「ALECX」が地元ゆかりのアーティストを集めた感謝企画
12月18日（水）「GOODBYE PARCO」
出演：MOROHA／GLIM SPANKY（アコースティック、2人編成）
12月21日（土）「ありがとう 松本PARCO」
出演：SHE'II SLEEP／炙りなタウン／健やかなる子ら／the奥歯's
12月22日（日）「ありがとう 松本PARCO」
出演：TETORA／アルステイク／ミニナムジー

このほかにも閉店日に向けて、検討されているイベントもあるそうです。

「2025年2月末の営業終了まで、地域の方々への感謝を最大限表現し、松本PARCOならではの企画やイベントで楽しんでいただこうと考えておりますので、最後までよろしくお願いいたします」（斉藤店長）

12月後半～2月28日（金）
「ありがとう 松本PARCO」街中にフラッグ掲出



商都松本にぎわい発信プロジェクト実行委員会



松本PARCOのDNAが今後の松本を元気にする 今回がその一歩

デパートが閉店する際の儀式として、最後の営業が終わり、降りていくシャッターを挟んで客と店舗のスタッフが感謝の意を伝え合う風景はよく報道されます。1984年に開店し、街の中心部ににぎわいを創出してきた松本PARCOが2025年2月に閉店することになりました。地元の有志が「ありがとう松本PARCO」実行委員会を立ち上げ、最後の数カ月を盛り上げようと、歴史を振り返り、別れを惜しむイベントなどを実施します。ここに秘められた想いこそが、なんと松本らしさを感じさせるものではないでしょうか？

城下町・松本には“かつぐ”あるいは“支える”といった文化が根づいていると言われます。今で言えば、推し活？ クラシックの小澤征爾さん、歌舞伎の中村勘三郎さん、サッカーの松本山雅…ボランティアとして熱狂的かつ献身的に推しを支える市民の皆さんの姿が見られます。そして松本PARCOです。こうした感謝企画が生まれるほどに、松本の街や人びとはたくさんの影響を受けてきたのです。

「イベントとして育ててもらった」と語る西片隆さんが、取材に応じてくれました。現在は「マツモト建築芸術祭」事務局、以前はグラマラスやスタイルカフェのパーティ企画を仕掛けてきた西片さんですが、その原点は松本PARCOにあるとのこと。「僕もしばらく離れていたけれど、斉藤（博一）店長

から最後に何か一緒にやりませんかと声をかけていただきました。そのときに、PARCOがあることが松本の自慢だと感じている人が大勢いるのを思い出して、店側から何か仕掛けというより街側から感謝を伝えることをやりたいという話をしたんです。でも、この考え方も松本PARCOから教えられたもの」（西片さん）



記者会見した「ありがとう松本PARCO」実行委員会

現在、実行委員会のLINEグループには約100人が名前を連ねているとか。松本PARCOに出店していた人、働いていた人、街でファッション関係や美容院などのお店を営んでいる人、お客さんなどなど。発起人代表としてセレクトショップなどを運営する小林寛さんが立っていますが、グループに上下関係はなく、誰かが“こんなことやりたいね”“それいいね”となれば動き始める関係です。

松本PARCOが誕生した背景は、PARCOで社長や会長を務めた増田通二氏のお父様が松本出身の日本画家で、そんな縁から、当時の青年会議所などが招致運動を行なったことです。「オープンする際のコンセプトは、歴史ある城下町を舞台装置として取り込みながら、新しさを演出すること。ファッションブルなシティマインドと松本のトラディショナルマインドをミキシングすることによって、松本から新しい文化を発信していくことでした。アートやカルチャーを大切に、共感する地域の方々の感性と支えがあったからこそ40年間にわたり営業できたと感じています」（斉藤店長）

西片さんはウエントズ英士 & 小池徹平、rinka、少年ナイフ、カジヒデキ、Monday満ちる、クラウドベリー・ジャムなどを招聘するイベントを企画してきました。

「一番印象に残っているのは、6階でCLUB PARCOというパーティをやらせていただいたこと。閉店後に店内に300人くらい集めて。それが僕が県内で始めたパーティ企画の原点。それまで長野県にこの手の企画はなかった。それも松本PARCOの人たちが面白いからやってみようという無理を聞いてくれたから」（西片さん）

東京のPARCOの様子からは想像が付きませんが、とにかく松本PARCOが地域に開いてくれていたことで、文化の交流が起きました。

「PARCOは、各々のエネルギー表現の場所であり、それらが混ざり合い融合する場所だと考えています。だからこそ運営する我々はエネルギーをもって街に溶け出して、街の人と融合して新しいコトをつくってきました。これまでご来店いただいたショップ、イベントを企画していただいた方、イベントに参加していただいた方。そんな街の人たちと、1対1でエネルギーを融合させる関係性が松本PARCOを創り上げたのだと思います」（広報・清水航さん）

もちろんカルチャーの発信源であるだけに、東京発のイベントや展覧会なども松本にやってきましたが、音楽、映画、本、パンなどさまざまなテーマを掲げた地域の人のイベントも枚挙にいとまがありません。

最近でもアートの力で新たな人の流れを呼び起こし、中心市街地を活性化させるプロジェクト「松本ま



上/松本市美術館×松本PARCO
「パルコ de 美術館」より

右/松本出身、
飯沼英樹作品の展示



「クラフト・スクエア」より

ちなかアートプロジェクト」の一環で開催された「松本市美術館×松本PARCO パルコ de 美術館」、コロナ禍でのクラフトフェアまつもとの出張企画もありました。

2004年の信州・まつもと大歌舞伎の際に、市民が自由に隈取りを描いたお面を展示し、勘三郎さん、串田和美さんが賞を決めて松本PARCOから賞品をいただいたこともありました。まつもと街中大道芸では、会場の一つでした。また、PARCO劇場『ロッキー・ホラー・ショー』ではクリスマスに絡めた広報協力も！

「松本PARCOは松本のブランドを高めてくれた。オープンする前の松本は、パンカラな雰囲気、かっこいい洋服が置いてあるお店は少なかった。ブティック、美容院など数でいったら数倍になっていると思う。松本PARCOで営業した後には路面店を出したり、影響を受けてお店を出したり。閉店は残念だけど、残りの3カ月、さまざまな企画を通してたくさんの方々が遊びにこれるような環境をつくるのが僕らのミッションであり、感謝の表現です。そして松本PARCOのDNAを持った面白いことをやっている人、いいお店を出した人たちが、街を元気にしていくバトンを受け取ります」（西片さん）



PARCOのある風景



信毎メディアガーデンの3階テラスからの景色がものすごく良いことに初めて気付いたのは正確にはいつだったか曖昧だが、この風景を描いてみたいと思ったきっかけがある。印刷立ち会いのため東京から松本を訪れた2人を連れ、帰る前にビールを飲み立ち寄ったときのこと。善光寺街道から伊勢町通りがのびていき、その先に北アルプスの広がる眺めは清々しくて、気持ちが良かった。その方は東京で読書をするための店を営んでおり、後日この時のことを文章にしてくれた。



このずれなく目の前からまっすぐ道というビューは僕にはとても新鮮でシャンゼリゼ通りという感じがする。眼下を行き来する車の動きもよくて速度を落としたりレーンを変えたり曲がったり、そういう動きがささやかな音で聞こえ続けてこれはアンビエントフィルムでありアンビエントミュージックだ。阿久津隆『読書日記』#147 (2021/10/30配信)

初めて訪れた人の目から見ることで、見慣れた場所を特別に感じる。いっぽう私の目に留まるのは、夕焼けの中に浮かび上がるPARCOの文字だ。長野で育ってきた子供にとって、この大きなネオンは特別なものだったのではないだろうか。現在の渋谷パルコへ行くと開業時の外壁ネオンサインが展示されており、インパクトあるオブジェなのだが、自分にとっては松本の記憶が呼び起こされるものだった。彫刻家・デザイナーである五十嵐威暢さんによって制作され、ネオン看板だけでなく、入口の壁面オブジェやドアノブの部分にも施された幾何学的な造形には惚れ惚れする。(ちなみに、公園通り側の入口は細い書体で別のものだ。これも開業当初から存在し、全国的に複数のパターンが混在しているのが面白い。)



2025年2月に松本パルコは閉店する。街の風景は変わる。例えばかつて大きな書店があったことも、ボウリング場があったことも、おぼろげに覚えていても街の形をはっきりとは思い出せない。阿久津さんの感じたアンビエントミュージックを再現してみたくて、建物の構造や空間に苦勞しながら街を描こうとするのは、ひとつひとつを手で触るように確かめ、発見しなおす作業だった。10年後にはこの絵をどのように感じるだろう。



Illustration & Text

otama



太田真紀/イラストレーション、ビジュアルストーリーテリング、またそれらを軸としたデザインなどが得意。デザインファーム・Takramでの勤務を経て、2021年4月よりイラストレーターとして独立。松本に住んでいますが、まだまだ知らないことばかりです。otama-ki.com

[特集]

ありがとう松本PARCO

vol.

05

2025

Winter

ねこあし

